

## 祭祀關係遺跡の考察

佐藤 虎雄

### 緒論

近年國體明徴・敬神崇祖の風が高唱せられ、國史の方面に於ても神道・祭祀等の研究が著しく盛になつた。祭祀に就いては記紀等の古典はじめ、幾多の文獻によつて天神地祇或は祖神氏神を祭り種々の祭祀を執行つた事實を傳へ、此の方面は從來相當に詳細に研究されて來たところである。然るに近時考古學的方面の新しい研究によれば、先史時代・原史時代にわたり、古代の遺跡の中に當時の祭祀關係と推定せらるゝものが所々に發見せられて來た。之によると我が國に於ける祭祀の源流の悠遠にして而も殆んど具體化してゐたことが伺はれる。

我が國古來の祭祀に就いては古典文獻によつてその形

式方法を大體知ることが出来るが、一々の具體的な事象に就いては更にその遺跡遺物を考察しなければならぬ。併しかゝる研究は近年漸くその緒に就いたばかりの所謂搖籃期である。隨つて未解決の問題が多々あるのであるが、こゝに敢えて祭祀關係の遺跡を述べて考察して見度いと思ふ。

### 一般遺跡との關係

我が上代に祭祀を行つた場所は我々の祖先氏族の居住地、若しくは其の勢力圏内に存することが多く、全く遠隔の地にあることは原則としてない。即ち上代遺跡の中に祭祀に關する所もあり、古い神社が上代遺跡地に鎮座してゐるのも之がためである。神社の境内或は之に接し

て遺物を發見し其處が上代遺跡なるを知る場合が往々にしてある。而して其の神社の創祀及び其後の祭祀が遺跡と直接に關係ありや否やは遽に決することが出来ないが、少くとも其の遺跡の齋す古い文化の背景のもとに祭祀が行はれたことを知る。

古い神社或は祭祀傳承地が石器時代の遺跡に鎮座し、或は發見せられることが屢々ある。武藏の氷川神社・下總の香取神宮・常陸の鹿島神宮等は縄文土器包含地に鎮座してゐる。飛驒の荒城神社(式内社)では昭和七年五月本殿基礎工事中、石斧・石槌及び縄文土器を大和の石上神宮境内よりは石鏃を夫々發見した。大和南葛城郡御所町の鴨都波神社(式内社)附近や曾我都比古神社の西隣田畑の發掘によつて何れも重要な石器時代遺跡なることが知られた。大神神社の三輪山附近を被ふところの沖積層は何れも彌生式土器を伴ふ石器時代遺跡を以て充され、丹波の赤國神社(式内社)の境内も彌生式土器の包含地である。

神社の境内より銅鐸を發見したことも屢々ある。尾張

祭祀關係遺跡の考察(佐藤)

東春日井郡小牧町の郷社外山神社(式内社)丹後與謝郡桑飼村大字明石の須代神社(式内社)備前の國幣小社安仁神社の如き此の例である。銅鐸發見遺跡の性質は不明であるが其の中で式内社等の古い神社境内よりも發見するといふことは注意すべきである。銅鐸は寶器であるといふ説があるが、果して然らば之が發見地は祭祀關係の範疇に入るべき遺跡であらう。

上代の古墳地帯に神社の鎮座する例は頗る多い。上代人の住居と墳墓とは密接なる關係があると同時に祭祀も住居地若しくは程遠からぬ所で行はれた。それが神社となつて發達し存続したものが多い。

此くの如く上代の祭祀遺跡或は神社の創祀鎮座地は上代の遺跡地の中に考へられるが、其地點を定めることは特殊な場合を除いて困難である。地理的に考へて筑前の宗像三社の中で沖津宮・中津宮の鎮座地が今の大島・沖島なる兩孤島に存することは疑ふ餘地がない。併し邊津宮に至つては適確なる地域を據に定められない。

註① 香取神宮の地は青山東西南の三面を圍んで五峯と呼ばれ、

- 社はその中央なる龜甲上に鎮座してゐる。この境内の一部は貝塚をなし、石器や縄紋式土器を含む遺跡である。
- ② 鹿島神宮は社境を御笠山といひ本宮から奥宮まで數町の間は縄紋式土器の包含地である。
- ③ 南大和の石器時代遺蹟 山中樵 考古界五ノ七
- ④ 奈良縣三輪町山ノ神遺蹟研究 樋口清之 考古學雜誌十八ノ十
- ⑤ 赤國神社及附近遺蹟 梅原末治 京都府史蹟勝地調査報告第一冊
- ⑥ 津田應助氏報告  
大正四年四月境内東端に植樹の際地下凡そ三尺の處から偶然掘出されたものであるといふ。
- ⑦ 明治三十八年の頃境内の擴張工事に際し社殿の東方約二十間の所に位して、地下の大石の下から偶然出土したものと云ふ。
- ⑧ 桑飼村須代神社境内發見銅鐸 梅原末治 京都府史蹟勝地調査報告第一冊  
明治二十三年及び同二十五年の兩度の大風雨の爲に神社背後の山崖崩壊したので、明治二十六年四月にその土砂を取り除いてある際に土の中から偶然銅鐸を發見したといふ。

自然的關係

我が上代の祭祀狀態を顧るに地形や方位に隨つて自然を對象として敬虔の念を捧げたものと思はれる。山嶽や森林を仰ぎ或は河川や湖沼に臨み、或は磐石や樹木にも神靈を認め、之に奉齋の實を示したのである。神武天皇は丹生川上で天神地祇を祭り給ひ、また靈時を鳥見山中に立て皇祖天神を祭り給ふた。祭祀の遺跡はこの自然的條件を離れてはならない。

かゝる自然崇拜より發して山や杜を神體或は神の御座所として神聖視し、この神の山、神の杜を神奈備或は三室(諸)山といひ、此處に祭祀の遺跡を求めることが出来る。神奈備なる名稱は山城・大和・攝津・出雲・美作・伊豫等の諸國にのこり、神奈備の外に神奈樋・神名火・神南甘南備等の文字を用ひ、多くは樹木鬱葱たる山を以て稱せられてゐる。就中最も多く記されてゐる古文獻は出雲風土記で次の四ヶ所の存在を傳へてゐる。

- 意宇郡神奈樋山 高八十丈 六里三十二步 八東郡茶臼山
- 楯縫郡神奈樋山 八東郡大船山 標高三二七米
- 秋鹿郡神名火山 高二百卅丈 周二十四里 八東郡朝日山

出雲郡神名火山高百七十五丈

簸川郡佛經山標高三十六丈

秋鹿郡の神名火山は國幣小社佐太神社で豊富なる遺物  
包含地をなし、出雲郡の神名火山の嶺には伎比佐加美高  
日子命社が鎮座し、幡縫郡の神奈備山には「有石神」と註  
し其處に祭祀の行はれたことが伺はれる。萬葉集（卷一  
〇）には大和國生駒郡龍田町の神南森、古今集には攝津  
國三島郡御領村の神奈備森が夫々詠せられてゐる。今な

ほ傳稱してゐるのは山城國綴喜郡田邊町薪の甘南備山  
（標高二〇二米）大和國生駒郡龍田町大字神南の神南山で  
ある。田邊町の甘南備山には式内の甘南備神社が鎮座  
し、龍田町の神南山は一に御室山ともいひ山上に神岳社  
といふ古社がある。此の外に美作國久米郡佐良山に神南  
備山（神邊山）、伊豫國大洲町に神南山と云ふのがある。

また御室山（三諸山）といふのも神奈備と同じ意味で稱  
せられたものであらう。大和・甲斐・武藏等にこの例を  
見る。大和では三輪山は別に神並山・三笠山とも云ひ萬  
葉集（卷十三）に「神名備の三諸山に」と詠ぜられ大貴已命  
の和魂を漫ります神奈備である。官幣大社大神神社では

今なほ山そのものを御神體として祭り山竈に拜殿があつ  
てその後から祭足地になつて特に茶臼山といひ、嘗て玉  
類・土器等を發見し、考古學上顯著な遺蹟である。又飛  
鳥の雷岡も三諸山といはれ、祭祀の對象になつた所であ  
らう。武藏兒玉郡青柳村の御室嶽は官幣中社金鑽神社の  
神體山で岩石の露出したところに唯御扉をつけて奉祀し  
てゐる。

神奈備・御室山といふ名稱がなくてもこの形状性質を  
有する遺蹟は諸國に見られ其處に古い神社等の鎮座する  
ものが多い。その著名なものは山城國下鴨の糺社・上賀  
茂の神山・伊賀國の南宮山・伊豆國吉佐美・下野國の二  
荒山・岩代國の三森・出雲の大濫山・肥前國の春日山等  
である。糺社は賀茂川・高野川の合流する三角洲即ち只  
洲は川合と稱せらるゝ所にあつて官幣大社賀茂御祖神  
社の杜をなし、上賀茂の神山は官幣大社賀茂別雷神社の  
神奈備である。伊賀の南宮山は國幣中社敢國神社の神奈  
備式靈山でその北麓に神社は創祀されてゐる。二荒山は  
宇都宮市の略々中央の小丘で國幣中社二荒山神社が鎮座

し、その社地より玉類・金環石製品・土器等祭祀關係の遺物を發見した。

我上代には神靈を奉齋する神聖なる施設、またその齋場を「ひもろぎ」(神籬)と稱した。その施設は崇神天皇の御代神鏡を奉遷して笠縫邑に齋き奉つた時に磯堅城神籬を立てたと記し、萬葉集(卷十二)には「神奈備に神籬立て、齋へども」と詠じてあるから、神籬とは賢木を以て神境を繞らすと從來考へられてゐた。神境を劃するには何か立てなければならぬ。それには賢木が最も適したものである。ひもろぎの「ぎ」は木(森)とするが城册とするか二説あるが、ともかく神靈を招奉り馮鎮り給ふ所である。併しこの神籬の遺跡といふものは考古學上あまり顯著には認められない。

神奈備や神籬に於て外見して祭祀の對象となるのは岩石である。これは巨石群をなす所もあるが、上代人はこの石に憑依する神の存在を認め石神と崇め磐座、磯城磐境と稱した。大和國三輪山・近江國三上山・備後國磐田山・伊豫國大洲町の神南山・豊前國御許山等が知られて

ゐる。三輪山には「大三輪神三社鎮座次第」に記すが如く大神神社拜殿の直後から禁足地にかけて與津磐座、中津磐座、邊津磐座の三座が存在し、殊に邊津磐座の近傍からは多數の滑石製品や土器を發見したといふ。三輪山の西麓馬場なる出雲屋敷の山神には大小自然の巨石があつて、その下から多數の石製模造品や土器を發見し、之も一種の祭祀の遺跡と考へられる。三上山は俗に近江富士(標高四二米)といはれ、その西麓に官幣中社御上神社(式内社)が祭られてゐる。社傳では天之御影命を祭り、御上祝が三上山を嚴の磐境と齋ひ定めたものであるといふ。

備後國沼隈郡柳津村金江村に連る丘陵は立石・平石が數多露出し、その山腹より麓にかけて此等の石材を利用してと思はれる多數の石室古墳が存在してゐる。而して金江村の磐田山の頂上に近いところには立石と稱する巨石が古來信仰されてゐる。先年調査の際、この石の分裂した間隙から土師器の殘缺を少量發見したといふ。豊前國御許山は宇佐八幡宮の根元の地で山上に巨石がある。

さて石に憑依する神の存在を認め石神と崇めたことは風土記に次の如く記してある。

出雲國楠縫郡神名樋山 山西有石神高一丈周一丈許有

小石神百餘許……所謂石神者卽是多伎都比古之御

魂、當<sub>ニ</sub>畢<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>雨時必令<sub>レ</sub>零 (出雲風土記)

出雲國飯石郡琴引山 又有石神高二丈周四尺 (同上)

播磨國揖保郡揖保里神山 此山在石神故號神山

(播磨風土記)

肥前國佐嘉川 又此川上有石神名曰世田姬

(肥前風土記)

巨石崇拜に關して考古學上問題になつてゐるのは神籬石(皮籠石・香合石)である。この遺蹟は筑前・筑後・豊前・周防に互り六ヶ所存在してゐる。之は山上の一地域を列石で圍繞した石造遺物で大陸に存する山城を模倣した一種の城郭であると云ひ、或は古の磯城(石城)警境等と認め祭場の遺蹟とする説があつてその年代と共に未解決の問題である。

こゝに注意すべきは石城山・雷山・高良山・鹿毛馬に

は何れも神社が存し、殊に筑後國三井郡の高良山は豊筑肥六州の交衝に當る要害の地にして、此處の神籬石の圈内は高良玉垂命を祀る國幣大社高良神社(式内社)の神域である。且つ此の圏内には古墳もあり、其の他の場所から曲玉を發見してゐる。また周防國能毛郡鹽田村の神籬石は石城山を繞り石城神社(式内社)が鎮座してゐる。信仰としては雷山(水火雷電神社)・石城山・御所ヶ谷の神社では雨乞の神として雷神を祀り、また住吉神を祭つてゐる。

惟ふに神籬石は一種の城郭式遺蹟であるが、或場合には本邦固有の信仰思想に基いて祭祀を行ひまた鎮守の祠を建てたものであらう。そして神籬石の圏内が神社となつたのは第二次的のものであらう。

註① 祝詞考 加茂真淵 神奈備考 金澤庄三郎 國語の研究

② 校正作陽誌

③ 伊賀國南宮山麓の上代祭祀遺跡 大場盤雄 神社精神文化

第三輯

④ 三輪山上の巨石群 樋口清之 考古學研究第一輯

⑤ 奈良縣三輪町山ノ神遺蹟研究 樋口清之 考古學雜誌十八

の十

- ⑥ 所謂神護石は山城址なり 關野貞、考古學雜誌四の二  
 ⑦ 鳥見山靈時と神籬石 久米邦武、歴史地理十五の二  
 神籬石と盤境 喜田貞吉 同 十六の三

### 祭祀關係遺物の發見

遺物の發見は該遺跡の性質を究むる上に最も重要なことである。

何等地表上に標識なくとも祭器具と考へらるゝ遺物を發見する場合には其の近傍に於て祭祀が行はれたと推定される。これは一種の遺物包含層或は遺物散布地にして上代住居跡に見る遺跡とよく似てゐる。この顯著な例は南伊豆洗田の祭祀遺跡等をあげることが出来るが、こゝには現に存続する古い神社の宮域或は境内に於ける遺跡を述べることにする。

伊勢の皇大神宮・豐受大神宮兩宮域に於ては御正殿を主とする内院をはじめ、忌火屋殿・御酒殿・由貴御倉(内宮)五丈殿・神樂殿・御廄・御池・行在所・齋館等の附近より更に諸別宮攝末社の宮域に至るまで祝部土器や土師

器を包含してゐる。從來此等遺物の發見せられたもの一千五百點を越えてゐる。殊に神宮の御酒殿・北宿衛屋・別宮伊雜宮所管社佐美長神社附近よりは何れも稜の土製模造品を、内宮攝社坂手國生神社よりは土馬を發見し此等は何れも祭祀關係の遺物と見なされてゐる。

大和の石上神宮に於ては境内一帶より祝部土器・土師器を發見するが酒殿跡からは大形の甕を、禁足地よりは玉類・刀劍・鏃・耳環・石製模造品等を出してゐる。大神神社では三輪山麓境内なる攝社若宮神社・祓戸神社・御炊屋神社御近より祝部土器を發見する。伊賀の國幣中社敢國神社の攝社大石神社の黒巖附近よりは滑石製白玉と共に小形手捏の土器が數點發見された。

丹後國中郡周枳村なる大宮寶神社(式内社)の境内一帶も土器包含地で殊に西半部に多く拜殿の前方石鳥居の附近參道入口鳥居の邊より土師器祝部土器及土製模造品・石製模造品を多く發掘した。出雲の神社には多く八束郡佐太村なる國幣小社佐太神社の本殿の北方附近及び境内攝社母儀人本社の附近・同郡揖屋村の揖夜神社境内・同

郡玉作村玉作湯神社よりは夫々祝部土器に土獸と思はれる異形品が多く發見された。八東郡大庭村大字佐久佐なる八重垣神社は式内の佐草神社の跡で境内の鏡ヶ池と稱する小池は古來神池として今に信仰されてゐる。先年此の池を浚濬した時に多數の祝部土器や土馬等を發見した。筑前の宗像神社邊津宮の舊地といはれる遺跡から祝部土器石製模造品を發見したが殊に石製品の大ささ、石質・手法等は沖島祭祀趾のそれと同様であると云はれてゐる。

以上の遺跡より發見の土器以下の遺物は祭祀關係と考へられ殊に石製品や土製品土馬の如きは其の意義深いものである。即ち此等特殊な遺物の發見によつて其處が祭祀の遺跡と考へられる。祭器具は祭典終了後、故意に或は無意識に遺棄せられ今日遺物として發見せらるゝものである。古來神社では恒例・臨時の祭典が執行はれ、神饌には必ずや多數の土器を要したことであらう。伊勢の神宮に於ては發見土器の示す年代は古代若くは中世のみならず、近世・最近世にまで及んでゐる。かゝる連続性

は神宮の宮域が祭祀遺跡たるの特色にして他に例を見ざるところである。

註① 南豆洗田の祭祀遺蹟 大場磐雄 考古學雜誌二十八ノ三

② 神宮の土器 拙稿

③ 石上神宮寶物誌 大場磐雄著

④ 伊賀國南宮山麓の上代祭祀遺跡 大場磐雄 神社精神文化

⑤ 大宮寶神社 梅原末治 京都府史蹟勝地調査報告第五册

⑥ 宮幣大社宗像神社邊津宮と祭祀遺跡 田中華夫 考古學雜誌二十八ノ一

### 古墳について

我が上代の遺跡の中で重要なのは何といつても古墳である。從來日本考古學では原史時代の研究には古墳を對象とすることが多い。古墳は云ふまでもなく我が皇室の御陵墓を始め奉り各地の貴族豪族のおくつきである。古墳の存在は其地方氏族の勢力と活動を暗示し祭祀の執行政治の交渉を思はせ、その遺物は上代文化の狀態を物語つてゐる。上代に於ては古墳の營造及び古墳に對する祭祀と共に一方にはその神靈に對する祭祀が行はれた。而して古墳の中には祭神の御おくつきがあり、また奉齋に



從事した氏族のおくつきがあることを考慮しなければならぬ。いま祭祀の遺跡を考察する時古墳は度外視することが出来ないもので、こゝに神社と古墳との關係に就いて述べて見やう。

古來貴豪の族は其人死すればおくつきを造り厚く葬り之れを祭つた。我が上代おくつきに對して祭儀を行つたことは萬葉集の石田の王の去り給へる時丹生の女王の作歌(卷三)高市皇子尊城上殯宮の時柿本人麿が作歌(卷二)日並知尊殯宮の時柿本人麿が作歌(卷二)等の挽歌によつて伺はれる。之によるとおくつきの主體は即ち神として之を奉祀した狀を明かにしてゐる。

併し上代人のおくつきに對する思想は記紀の諸冊二尊が黃泉國に下向した神話に徴すると屍體を見たりすることは著しく穢れとして忌まれてゐた。故に死そのものを神聖視し祭つたことはあり得ても、屍體そのものを神格化して其のおくつきを取扱つたかといふことは疑問である。然るに死後ある年數を経れば生々しい屍體の穢れに對する思想は忘れられ、一途に神靈崇敬の念を生じておく

つきの主を神として祭を行ひ來つたものであらう。おくつきの石室が神社の如く取扱はれたことがある。常陸風土紀新治郡菟穂山の條に「古老曰古有山賊名稱油置賣命、今社中在石屋」と記し其の下に石屋は古墳石室を意味する一首の歌を載せてゐる。この様にしておくつきに對する祭が後には神社としての祭りに發展して來た。

おくつきの靈を祭るに其の齋場をおくつき自體に或は之に接して或は少し隔つた所に之を求めた。それが後に神社として存続したものがかなり多いと考へられる。神社の起源を考へると其の一にはおくつきの神靈を祭るに發したのもある。少くとも古墳地帯にある由緒古い神社の中には古墳そのものを對象としたものがかなり多く存するであらう。併し之は古墳そのものを祭つたのではなく専ら被葬者の神靈を祭つたものである。

神社と古墳との關係は遺跡上のみでは未解決で神社の確實なる文獻的考證を待たなければならない。中には偶然地形の關係で古墳が社地に選定され、或は石室や石棺の露出し、其他遺物の發見によつて之を神聖視して神社

を建てた場合もかなり存するのである。

おくつきの被葬者の靈が神社に祭られた顯著な時代は何時頃であらうか。それには先づ神社制度の確立した延喜式を中心とする平安時代初期乃至は前期を考へて見る必要がある。平安初期は火葬行はれ從來の大規模の古墳は漸く忘れられんとしてゐたが、神社によつてはその創祀の背景をなす古墳を意識したのもあつたであらう。即ち延喜式の頃にはおくつきの祭が既に神社の祭祀として行はれたものであらう。果して然らば此頃の古社の中には之と接する古墳と相關係するものもあつて注意しなければならぬ。

皇室の山陵に就いて考ふるに陵の傍にその大君を祭つて現代に存續してゐる神社は少い。日向・大隅・薩摩に互る所謂神代三陵は延喜式によれば何れも無陵戸で山城國葛野郡田邑陵南原に於て遙かに之を祭つたことを記してある。此等の中で埃(可愛)山陵の陵域には瓊々杵尊を祭る國幣中新田神社がある。當社は永萬元年の文書によると貞觀年中再興とあるから、その創祀は極めて古い

ことを知る。もと社殿は現在の中位に在つたが高倉天皇の承安三年神火の災禍に罹り本殿以下炎上したので安元二年後白河上皇の宣旨を下されて山頂に奉遷し、神社の直後が山陵である。「聖蹟圖志」の埃之山陵の圖は勿論神社が山頂に遷つてからの作である。とにかく新田神社と埃之山陵とは密接な關係があるやうである。

神社と山陵と場所的に密接な關係にあることの最もよく伺はれるのは紀伊國海草郡三田村の國幣大社竈山神社と其の祭神五瀬命の御墓とである。この御墓は古事記に陵と記し、延喜式諸陵には「竈山墓、五瀬命在紀伊國名草郡、兆域東西一町南北二町三畑遠墓」と見え、同神名帳には紀伊國名草郡十九座の中に竈山神社と記してあつて同所が陵としてまた神社として記されたものであらう。社傳の一説によれば尊骸は竈山に葬り、その崩御の地、雉の水門即ち今の和歌山湊惠比須の地に社を建てたが、その後神託により今の地に遷し奉つたといふ。

河内國南河内郡古市町の譽田八幡神社に於ては應神天皇陵との關係がある。この八幡宮は佛教の影響によつて

榮えたのであるが「譽田八幡宮縁起類」・「神功皇后御縁起」等によれば、欽明天皇の時、勅詔によつて廟前に南面に社壇を建てられたのに創ると説明してゐる。そして後冷泉天皇の永承六年に社殿を新に造り、陵より一丁南に移した事になつてゐる。永承元年の源頼信の告文・保安四年の別當法印光清の告文には何れも山陵に坐す八幡大菩薩の、廣前に申すと云ひ、保延三年四月の檢校法印光清の起請文には山陵は大菩薩御兆域といひ、其の祠三味堂並に新宮を建立し供僧を定置し佛事を勤修し神人を補任し祭祀を勤行し其の年尙しと述べてゐる。即ち平安時代中期には既に此の山陵に八幡神としての祭祀が行はれたことが伺はれる。而して佛教の方ではこの山陵に護國寺が出来て社僧も置かれ數多の堂宇が建てられ陵の後圓部には明治維新まで奥院が建つてゐたといふ。

一般に由緒の古い神社にして境内若しくは其の近傍の古墳と密接な關係にあると認められるものが諸地方にある。關東地方で例をあげるならば上總國長生郡本納町なる橘神社(式内社)の境内に一古墳がある。當社は日本武

尊が妃弟橘姬命が海に投ぜられたのを深く哀悼し遺物を納めて御墓をつくり祠を建てたといふのが創祀である。

中部地方では尾張・飛驒・駿河・信濃及び北陸諸國に著しい。名古屋市の官幣大社熱田神宮では白鳥陵を日本武尊の御墓、斷天山古墳は姉山御墓と稱し宮簀姫命の御墓と傳へ何れも雄大なる前方後圓墳にして同神宮の境内に入つてゐる。また熱田東町字高藏には同神宮攝社高座(結御子神社(式内社))が鎮座し境内には高藏古墳といふ圓墳がある。尾張國丹羽郡樂田村なる國幣中社大縣神社(式内社)の西方には青塚といふ前方後圓墳があつて、祭神の御墓と社で傳へ、飛地境内になつてゐる。同國東春日井郡志段味村なる尾張戸神社(式内社)の附近には白鳥塚といふ前方後圓墳をはじめ多數の古墳が分布してゐる。

飛驒國吉城郡國府村大字宮地なる荒城神社(式内社)では境内の東南部荒城川に臨んで周圍凡そ三間餘の圓墳があつて、上古大荒木命の遺骸を殲した舊蹟と傳へてゐる。靜岡市の國幣小社神部淺間大歲御祖神社の背面賤機山には古墳郡があり、殊に大歲御祖神社の直後に一古墳

の趾がある。信濃では諏訪に著しく上諏訪神社本殿背後には所謂神陵を中心に數基の圓墳が散在し、下諏訪神社の攝社なる青塚神社は青塚といふ前方後圓墳の括れ部に社壇を祭つてある。北陸では能登に著しく、國幣大社氣多神社・羽咋神社・椎葉圓比咩神社等の舊式内社の境内に夫々古墳がある。氣多神社の後方丘陵には三基の圓墳があり、この附近に奥宮と稱する靈地があるが、蓋し古墳の趾と思はれる。羽咋神社の境内には大塚又は御陵山と稱する前方圓墳があつて、之は大正六年九月に垂仁天皇皇子石衝別命御墓と治定せられた。椎葉圓比咩神社には封上の略々完全な前方後圓墳があつて石室の一部を露出し、曾て此處に社殿があつたが今は東方平地に遷御した。越後の國幣中社彌彦神社では境内參道の南方及び舊乙子神社の南方に方墳と思はれるものがあり、神社の古圖には攝社勝神社に五輪塔を建てゝある。

近畿地方では山城・大和・伊賀・丹波・但馬等にこの例を見る。山城國乙訓郡向日町の向神社(式内社)では社殿の北に接して元稻荷と稱する宏大なる前方後圓墳があ

る。大和國山邊郡朝和村の官幣大社大和神社の境内には星森と稱する前方後圓墳があり、四月一日の例祭には同村中山なる大塚山に神幸するといふ。大塚山は前方後圓墳にして淳名城入姫命の御墓と傳へてある。伊賀國名賀郡依名古村下郡の猪田神社(式内社)の社殿の背後に前方後圓墳がある。

丹波國南桑田郡千歲村の國幣中社出雲神社(式内社)の背後千年山の一部にも石室の露出した古墳が遺つてゐる。但馬國出石郡神美村の國幣中社出石神社の境内には八間四方で四面石を疊み、樹木の茂つた所があつて、此處は俗に御廟山と稱へ天日槍命の御おくつきと稱へてゐる。

中國地方では山陰に著しく出雲の國幣大社熊野神社・石見の國幣小社物部神社・隱岐の國幣中社水若酢神社等何れも社殿の直後に御祭神の墳墓と稱する所がある。熊野神社の社殿の後方には瓢形の丘があつて其の東部が積石塚をなし素尊御陵と傳へらる。物部神社に於ては本殿の後方山頂に方二間半に柵をめぐらし、その内部に方一

間高さ約三尺の積石があり、その周圍に多く墓石がある。此處は社傳では御祭神の御おくつきと傳へてゐる。水若酢神社の社殿は舊位置より後退して前方後圓の封土の一部を平夷にして、こゝに社殿を建てたものである。

山陽では備前國吉備郡真金町なる官幣中社吉備神社(式内社)と祭神吉備津彥命の御基との關係が考へられる。即ち神社の後方は所謂吉備中山でその山頂に茶臼山と稱する前方後圓墳があつて祭神の御墓と御治定になつてゐる。この神社はこの御おくつきを對象として祭られたものである。吉備津神社古圖にも吉備津彥命白陵と名づけてこの御墓を畫いてある。

以上諸地方の古い神社の中には古墳の封土の一部に或は之に直接して社殿を建て 祭られてゐる。社殿の位置に就いては往古より變遷あるも古墳を避けてその麓或は少し隔つて建てるものが多い。とにかくその神域で古墳が主要なる存在を示す場合には祭祀に特殊の關係を豫想することが出来る。

神社と多少離れたる土地にある古墳でも之に祠を建て

、諏訪神社の青塚の如くその神社の攝末になつてゐる所があり、神社の飛地境内には大縣神社の青塚の如く古墳の存在が主要なる理由になつてゐる所がある。古墳と神社との祭祀關係の所傳に就いては時代的にも内容の上にも變遷があり、或時代に何等かの機會に唱道せられたものもある。併しかゝる所傳はその神社祭祀の信仰の問題として見て行かなければならない。

さて祭祀の行はれた場所は祭神の所縁の地、若しくは之を祭つた氏族の住居圍の中に求むべく、その神去りました所、或はおくつきの場所は最もよく適してゐる。筑前の官幣大社香椎宮には古宮といふ遺跡がある。之は仲哀天皇神廟のあつた舊址で天皇崩御の時皇后躬ら天皇の神靈を奉齋した所でこれが最初の香椎宮である。葬の後にその神靈を奉齋した場合にその遺跡として祭場跡及び附近の古墳を注意しなければならぬ。

我國上代は氏族制度整ひ、一族を擧つて日々その祖神氏族神を崇敬した。この氏神を祭つた場所に祖神のおくつきや祭祀に奉仕した氏族のおくつきも考へられる。故

に神社附近の古墳の中には祭神または奉仕氏族のおくつきもあり、然らずとしても古い神社にあつては古墳の齋す文化のもとに祭祀が行はれたものである。神宮鎮座の宇治山田市の内外には高倉山・虎尾山・尾上の丘陵・倉田山・稻荷山や宮川の流域に古墳が存在し、その遺跡は開發整理されたものが多いが發見の土器は相當多く遺存してゐる。神宮發見の土器を此等と比較すると古式のものとは同形同種類である。即ち古墳の表す文化の背景のもとに神宮の祭祀も行はれて來たものである。かく考へ到る時、古墳を祭祀から切離して考へることは出来ない。祭祀關係遺跡の中に古墳は重要な地位を占めてゐる。

(昭和十六・二・二十八稿)

註① 神社と考古學 宮地直一 考古學講座

② 許智多難波、畢婆頭夢夜麻能、伊波歸示母、爲且許母郎牟  
茶、古非叙和支母(已下略)

③④⑤ 石清水文書

⑥ 神宮家記 寛政十一年本社再建に當り社後の丘を整るこ  
と數尺にして大小の瓮壺十一を出す其鐵造二、陶九とぞ  
大日本地名辭書 吉田東伍

⑦ 名古屋市斷夫山古墳 伊藤文四郎 愛知縣史蹟名勝天然紀

念物調査報告第六

斷夫山は日本武尊と共に熱田神宮御相殿の一たる宮簀媛命の御墓として世に知られ、古來熱田神宮大宮司たる千秋家に於て代々奉行して來たが明治九年六月舊教部省より白鳥陵と共に熱田神宮所屬地と定められた。大正十五年一月神宮應にては宮簀媛命之墓の標柱を建て守衛の詰所を設けて嚴重に管理してゐる。

⑧ 愛知縣内古墳地名表 愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

書第十

⑨ 樂田村青塚(茶白山)古墳 同 第八

⑩ 駿國雜誌 阿信正信 鈴鏡記 山梨高度

⑪ 諏訪史 宮地直一

⑫⑬⑭ 石川縣史 第五編

⑮ 向神社附近の古墳 梅原末治 京都府史蹟勝地調査報告

第二册

⑯⑰ 奈良縣山邊郡誌 中卷

縣内御陵墓・同傳説地及び古墳墓表 奈良縣史蹟名勝天然  
紀念物調査報告第八回